

書写

将来にわたり自信を持って手書きするための  
書写教科書として

『新編 新しい書写』のポイント

←左の二次元コードより、『新編 新しい書写』の特長をご覧ください。



この資料は、令和6年度小学校教科書の内容解説資料として、  
一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則っております。



じょうつぎょういっく  
上越教育大学  
教授  
新編 新しい書写 編集代表  
**押木 秀樹**  
おしき ひでき

さらなるICT化にも対応した手書きの学び  
—主体的な学びである必然性—

私たちの文字使用の状況は、20年前と今とでずいぶん変化している。同様に、子供たちにとっての手書き文字との関わりが、大人になっても現在と同じであるとは限らない。そのときの情報伝達のありように合わせて文字を的確に用いることのできる資質・能力を育てなければならない。

一方、明日の教室において、子供たちが自分の字に自信を持ち、自分の字を大切に思いながら書き進めることのできる技能や、場面に応じて手書きができる能力も求められる。さらに文字環境がどのように変化しようと、(漢字の歴史でいえば、少なくとも)三千数百年におよぶ手書きの習慣や文化を継承していくという大切な役割もある。『新編 新しい書写』は、それらの学習活動を行うのに適したものでありたい。

国語科書写は学習指導要領(平成29年告示)において、[知識及び技能]に位置付けられている。ただ、明日使えばよいだけの技能であれば、単に与えられた知識・技能であっても構わないかもしれない。しかし、将来にわたり手書きする力であるためには、主体的な学びによって得られる知識・技能であるべきであろう。図1は『新編 新しい書写(3)』の「書写の学び方」を示した部分である。整った文字を書

くための原理・原則である「書写のかぎ」を見つけ、実際に書いてみることで確かめ、そして、どのような文字に生かせるかを自ら考え、実際に生かそうとする過程が示されている。このような主体的な学びにより、思考力を働かせて得られた知識・技能が、未来の資質・能力として役立つ力となると考える。

子供たちの字の個性を生かしながら  
確実に読みやすい字を実現する書写の学び  
—的確な内容、協働的な学びである必然性—

かつての書写の授業でよく見られたような、たくさん書けば上手になるとか、もっと手本をよく見て書きましよう、あるいははいねいに書きなさいといった、学習内容を伴わない声掛けではなく、子供たちの主体的な学びを実現するため、適切な思考を導く「しかけ」が必要である。図2は、「画の長さ」における規則性を子供たちが自ら見つけ出すためのしかけである。

前述の原理・原則の理解とその応用は、多くの字に生かすことができる学習である。それと同時に、子供たち自身の文字を大切にすることでもある。ひたすら手本に似せる学習は、子供たちの文字の個性のうち、悪い点ばかりでなく良い点まで失わせる可能性がある。一方、子供たちが原理・原則としての

「書写のかぎ」を見つけ、自身の字に適応する学習は、子供たちの字の個性を生かしつつ読みやすい字にしていく方向性をもつ。多様性を認め合う協働的な学習へとつながりうる。また、自分の字は見慣れているため、どこを直したらよいか気づきにくいことから、他者と学び合うことも効果的である。

さらに、図3は、4年生の「画の長さの間かく」のページにおける毛筆の教材例である。原理・原則の理解に加え、子供たちがこんなふうには書けるようになりたいと思うような硬筆・毛筆教材の提示は、従来と変わらず大切にしていきたい。

動作の視点の充実と身体への意識  
—水書用筆を用いた点画の書き方など—

子供たちの筆記具の持ち方がおかしい、文字を書いている姿がぎこちないといった声が聞かれ、学習指導要領(平成29年告示)と同解説では、点画の書き方など、動作の視点の充実が示されている。良い字の書き方が分かったうえで、手を動かし、動作として実現できなければならない。

学習指導要領解説では、そのための方策として、水書用筆の使用が例示されている。教科書でも、水書用筆を用いることについて



図4 2年 p.14 水書用筆コラム

とともに、同図に示されているように関連する教材において、学習しやすい配慮がなされている。

また、姿勢や筆

記具の持ち方(図5)、点画の書き方、筆順、点画のつながり、筆圧や穂先の動きといった学習内容に対し、教科書の学びを広げる動画教材を準備し、それを参照するための二次元コードを配している。教員の得意不得意にかかわらず、子供たちを生かす動作の学びが可能である。

文字を書く際の目的・相手意識の大切さ  
—生きて機能する文化として—

学習指導要領(平成29年告示)と同解説において重視された点として、文字文化に関することがある。例えば、図6の「かん字のはなし」のように、小学校1年生から、文字そのものの文化に触れる配慮をしている。また、文字を書くことについての文化は、歴史的なものばかりではない。社会における文字の役割や、文字を書く際の相手・目的意識、その効果について、現代の文字を書く活動に生かしていくべきものである。例えば、手書きしたいもの一つにお礼状があり、従来の書写教科書でもその「お手本」が掲載されていた。一方、図7の「お礼の気持ちを手紙で伝えよう」では、単なる手本の例示ではなく、主体的な学びが意図されている。そのほか、学習したことを生かす場面として、絵日記・観察カード・実験記録・年賀状・委員会のリーフレット・発表のためのポスターなどを設定し、効果的に生かせるようにしている。

このように、明日のノートやワークシートへの記入や、掲示物の作成などにおいても確実に生かすことができ、未来の文字を書く行為を支える書写教科書であることを確認したい。



図1 『新編 新しい書写』 3年 p.2-3 書写の学び方



図2 2年 p.18 画の長さ



図3 4年 p.11 画の長さの間かく



図5 1年 p.4-5 かきやすいもちかた



図6 1年 p.37 かん字のはなし



図7 4年 p.38 お礼の気持ちを手紙で伝えよう